様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３０８９５

研究課題名（和文）セラピストの発話に関する言語論的分析と訓練モデルの構築

研究課題名（英文）An analysis of the therapeutic way of words and its application to the psychotherapist training

研究代表者
大山　泰宏（Oyama, Yasuhiro）

京都大学・教育学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：００２９３９３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　セラピストの発する言葉が，心理療法の展開にどのような影響を与えるかを，発話内容とともに言い回し(発話の形式)の特徴に着目して検討した。発話の文法的特徴と対応して，クライエントの心的空間の設定，注意対象の生成，セラピストとの距離感などに影響を及ぼしており，その意識化により心理療法での介入がより適切なものとなりうることが示唆された。
　また，日本での来談者中心療法の変容過程に関する分析，さらには能にみられる表現や関係性の特徴を分析し，日本語の特徴や日本文化のコンテクストが，心理療法における言語表現の特徴や意味生成にどのような影響を与えているかを検討し，日本における心理療法の機序解明への示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：The way of words by psychotherapists was investigated in order to know their characteristics and how they work in the process of psychotherapy. The utterances of therapists in clinical situations were systematically collected and analysed not only by their contents but also by their grammatical features. It was found that the grammatical features relate with how psychic spaces or movements are created in clients’ mind as well as in the interpersonal relation.
As the therapist's utterances are produced using Japanese language in Japanese cultural context, the cultural factors are also investigated. The transformation of client-centred therapy in Japan was traced and the expressions and interactions in Noh plays are analysed as well. It was shown that the characteristics of Japanese language effects on the core features of Japanese psychotherapy, and that “the third” referred by both of clients and therapists forms a basis for interactions and changes in Japanese psychotherapy.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理療法　日本文化　日本語での心理療法　言語論的分析　コーパス　能

１．研究開始当初の背景

（１）セラピストが心理療法の場面で使用する言葉は、心理療法の展開に大きな影響を与えている。セラピストの発話は、クライエントと関係を築くうえでも、あるいは解釈や介入として治療を進展させる契機としても重要であり、精神分析の誕生以来現在に至るまで一貫して重要な検討の対象であり続けている。セラピストがおこなう発話に関わる判断過程は非常に複雑なものであり、そこにはクライエントの内面に対する共感性と想像力、クライエントとの心的距離に対する感覚,見立てなどが集約的に含まれているとともに、セラピストの心理療法に対する考え方や人間観、文化までもが深く影響している。セラピストがどのような発話をおこなうかということは、心理療法の実践的な課題と直結しており、心理療法のトレーニングやスーパービジョンにおいても重視されるものである。

（２）現在の日本の心理療法のトレーニングにおいては、事例研究（事例検討）が中心であり、そこでは心理療法の流れはストーリー的に把握され提示されることが多く、面接場面の一つ一つの言葉のやりとりについて議論されることは少ない。セラピストが使用する言葉に関する論考として、例えば Havens (1998)や Wachtel (1998) などが日本でも紹介されているものの、心理療法家の養成プログラムにおいてセラピストの発話に関する意識化と系統的な教育が十分になされているとは言い難く、その指導は各スーパーバイザーの個別的指導に依っているのが現状である。

（３）研究代表者は、これまでも心理療法における言語使用の重要性を意識し、心理療法における対話の性質に関して，とりわけ言語行為という観点から研究をおこなっていた。それらの一連の研究では、心理療法においてセラピストに向けて語るというクライエントの発話行為によって主体が新たに立ち上がり生成していくということが明らかとなり、また、セラピストの行為遂行的発言 (performative utterances) が、とりわけリミットセッティングに関する事柄や価値や希望といった次元に関わる事柄において決定的な役割を果たすことを示した。しかしながらこれらの研究は理論的論考が主であり、心理療法の場面において実際にどのような言語が使用されているのか、セラピストの発話にはどんなバリエーションや特徴があるのか、それぞれの発話はどのような効果を心理療法にもたらしているのかを明らかにするには、より実証的な研究が必要であった。

（４）これまでも言語学的観点から、実際に心理療法で使用されている言葉を丹念に収集し論じた先行研究はいくつかあるが、それらはすべて英語テクストをもとにおこなわれたものであった。また、日本語の特徴に着目した日本語臨床に関する論考もあるが、それらは語法への着目と観念的な考察にとどまるきらいがあった。

そこで、実際の日本語でおこなわれる心理療法で使用されているセラピストの言葉を分析し、それがどのような効果をもたらしているのかということを、実際の事例をもとに考察する必要があった。また、実際のセラピーにおける対話がもたらす効果は、クライエントの持つ文化的背景によって違いがあることが知られているため、その言葉が使用される文化的コンテクストや、私たちの日常的な言語使用に関する顧慮をも含めて分析をおこなう必要化があった。すなわち、日本で日本語によっておこなわれるセラピーに関して、主として使用される日本語の性質や日本の会話慣習 (conversational conventions) の特徴に鑑みた分析をおこなうこととした。

２．研究の目的

以上の研究の背景から本研究では、実際の日本語による日本文化の中での心理療法場面に根ざしたセラピストの発話を、言語論的に分析し、その結果をセラピストのトレーニングに応用することをめざした。そのために、以下の 3 つのことが目的として設定された。

（１）心理療法におけるセラピストの発話に関する会話分析：セラピストの発話における言語表現の特徴を、心理言語学および談話分析的観点から抽出・分析し、セラピストが構造化する談話の質的特徴と、その機能の機序を明らかにする。

（２）日本語や日本文化の特徴と心理療法の特徴との関係についての分析

①クライエント中心療法の日本における受容過程と変質に関する研究：ロジャーズのクライエント中心療法が日本語の特質や日本文化的特徴と関連してどのように変質し変遷してきたかを辿る。このことで、現在暗黙のうちに前提とされている、セラピストの応答の基本パターンの成り立ちについて探るとともに、そこに通底する日本語の心理療法に関する言語的特徴や文化的特徴について明らかにする。

②能の言語表現等の分析を通した日本文化の中での心的変容の様相の研究：日本の伝統芸能である能は心理療法と同じく、魂の変容と救済に関わるものである。能の言語表現のあり方や身体所作、テクストの分析などを通して、対人的相互作用の中での変容に関わる文化的な要素を抽出する。

（３）日本語における治療的モデルの構築とその検証：抽出されたセラピストの発話の言語的構造、および日本における心理療法の機序を意識することが、心理療法のトレーニン

グにどのように寄与するのか、その教育的効果に関する検討をおこなう。

３．研究の方法

（１）心理療法におけるセラピストの発話に関する会話分析

心理療法の事例研究、研究代表者の自験例、本研究のために用意された事例検討会での事例などから、セラピストの発話事例を抽出し、それが発せられたプロセスとコンテクスト、クライエントの反応や応答的発話に関する情報等を含め、コーパス（発話事例集）を作成した。その際、個人的な情報は削除し、事例の内容に係わる事柄もできるだけ捨象し、言語論的な構造や語用に着目して、分類・整理をおこなった。

そのうえで、言語論的な構造・語用とそれが受け手（クライエント）の側に、どのような心的機能を生じさせるかに関して、経験のある心理臨床家による系統的な評価と、それに基づくディスカッションにより、仮説を生成していった。

（２）日本語や日本文化の特徴と心理療法の特徴との関係についての分析

①クライエント中心療法の日本における受容過程と変質に関する研究：ロジャーズによるクライエント中心療法の日本での変容過程に関して、戦後の導入期以降の日本のカウンセリングに関する著作・対談集などを資料として収集し言説を詳細に分析し、どのような変化を辿っていったかを明らかにした。そのうえで、土居健居や河合隼雄といった日本の心理療法の特徴について論じている先行研究を参照にしつつ、さらには、日本語の構造の特徴や日本文化の特質に関する論考を参照しつつ、心理療法の中で生じている関係性のあり方、相互作用、治癒に関わる要因等を分析した。

②能の言語表現等の分析を通した日本文化の中での心的変容の様相の研究：日本文化と心理療法の関連を深く検討するために，心理療法と同じく「魂の癒し」が主たるテーマとなる，伝統芸能である「能」に着目し、能楽師を含めたワークショップを 2 回開催し、曲の構造分析，表現に関する身体的技法，ワキとシテとの関係のあり方などの分析をおこなった。そこでは、一見動きがないような状況の中で，どのような潜在的な心的なダイナミズムがあるのかということ、そしてそれがどのように心的な変容に結びついていくのかといったことが、検討された。

（３）日本語における治療的モデルの構築とその検証

生成されたセラピストの発話の言語論的なモデルを応用することが、どのような影響をもたらすか、事例検討会を通して、また仮想的スーパービジョンを通して検討した。また、発話ばかりでなく、発話がされていない「沈黙」のあいだにどのような心的過程があるのか、沈黙には心理療法においてどのような意義や役割について、実証的な研究と考察をおこなった。

４．研究成果

（１）心理療法におけるセラピストの発話に関する会話分析

発話の内容ではなく、発話の文法的・形式的な特徴（語尾に使用する助詞、現在形か過去形か、主語を誰にするか、複文か単文か等）によって、それぞれに発話の伝わるニュアンスが異なり、それに対応してクライエントの側に、同じ発話内容（コンテンツ）であっても抵抗が引き起こされたり、あるいは逆に抵抗が回避されたりといった違いがあること、さらには、クライエントが思考する心的空間が形成されたりされなかったりする等の違いが生じることが明らかとなった。こうした発話の形式による特徴を意識することにより、より有効に心理療法のプロセスが展開できる可能性があるとともに、心理療法での対話に関してより鋭敏な感覚をもちうることが分かった。

この知見の妥当性をさらに検証するために、熟練したセラピストによりひとつひとつの発話の形式に関して検討会をおこなうとともに、実際の事例検討にこの観点を応用したディスカッションが有効であることが分かり、心理療法の訓練にも応用可能であることが証明された。

（２）日本語や日本文化の特徴と心理療法の特徴との関係についての分析

①クライエント中心療法の日本における受容過程と変質に関する研究：ロジャーズのクライエント中心療法の変容過程に関しては歴史的研究にとどまらず、日本語による日本での心理療法の展開に関する本質的な議論へと展開した。この研究は国際学会での発表後、学会特集号での論文化が推薦され、英語論文が採択・掲載された。そこで得られた知見から、より長期的な心理療法の歴史的な変容に関し分析された。その結果、日本の心理療法に残り続けているアニミズム的な心性、明治期の催眠ブームの影響、さらには「内省促進」か「脱こだわり」という２つの相反するパラダイムが残存し続けていることなどが明らかとなった。

②能の言語表現等の分析を通した日本文化の中での心的変容の様相の研究：能における「シテ」と「ワキ」との関係は、クライエントとセラピストとの関係になぞらえられることが多い。直接の感情表出や表立った相互作用が必ずしも明確でない能において、シテがどのような内的体験をしているのかということと、日本の心理療法の経過やセラピストの内的体験を重ね合わせ、また、能のテクストに使用されているレトリック、特徴的なプロットなどから、西洋の葛藤解決のモデル

とは異なった、葛藤を内側に抱えておくparadox containing modelを提唱した。そしてそのためにセラピストがどのような関わり方であることが必要なのかといった、発話を支える心的過程に関して検討が進んだ。

この研究は、本科研の助成期間終了後の多くの共同研究や国際的研究、学際的研究へと発展していった。具体的には、ドイツのフランクフルト精神分析研究所とジグムント＝フロイト研究所での講演や精神分析家との対話のほか、ボン大学アジア文化研究科との共同研究の開始へと結びついていった。

（３）日本語における治療的モデルの構築とその検証

沈黙の意義に関しては、研究分担者となっている別の科研との合同でおこなわれ、国際学会誌に論文が採択された。そこでは、沈黙の時間の長い心理療法のほうが評価が高いこと、クライエントが発話の途中でおこなう沈黙（ポーズ）がとりわけ重要であり内省がおこなわれていることなどが見いだされた。

セラピストの発話が実際の心理療法の展開過程にもたらす影響に関しては、とりわけ軽度発達障害あるいはメンタライゼーションの障害に関わる事例の場合、第３の対象への言及を基盤に関係を構築し対話をおこなっていくことの有効性が確認された。この知見は，京都大学心理教育相談室の紀要での論文のほか，ドイツのジグムント＝フロイト研究所での講演で発表された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① Yasuhiro OYAMA, The transformation of Rogerian client-centered techniques of psychotherapy in Japan: Background and implications, Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy, 査読有, vol.3, 2011, 10-17
② Nagaoka,C., Yoshikawa,S., Kuwabara, T., Oyama, Y., Watabe, M., Hatanaka, C. & Komori, M. , A comparison of experienced counsellors, novice counsellors and non-counsellors in memory of client-presented information during therapeutic interviews, Psychologia: An International Journal of Psychological Sciences, vol.56(2), 2013, 154-165
③ Nagaoka, C., Kuwabara, T., Yoshikawa, S., Watabe, M. , Komori, M., Oyama, Y. & Hatanaka, C., Implication of silence in a Japanese psychotherapy context: a preliminary study using quantitative analysis of silence and utterance of a therapist and a client, Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy, 査読有, vol.4, 2013, 147-152
④ 大山泰宏、 心理療法における導入の問題、臨床事例研究：京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要、 査読無、40巻、 2013、28-32
⑤ 大山泰宏、発達障害の心理療法、臨床事例研究：京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要、査読無、40巻 、2014、23-27

〔学会発表〕（計 9件）

① Yasuhiro OYAMA, The transformation of Rogerian client-centered techniques of psychotherapy in Japan: its background and implications, 2nd Asian Pacific Rim International Counselling Conference, 2011年7月8日, Shue-Yan University, Hong Kong
② 大山泰宏、心理療法で何かおこっているのか(3)-学派による違いに着目して-、日本心理臨床学会第30回大会、2011年9月4日、福岡国際会議場
③ Yasuhiro OYAMA, Characteristics of Japanese Psychotherapy, Japanese Mentality, and the Reaction to the atomic catastrophe in Fukushima, フランクフルト精神分析研究所セミナー、2011年9月23日、 フランクフルト
④ Tomatsu,R., Sakai, A. & Oyama,Y., Learning from Noh: From a Conflict-Integration Model toward a Paradox-Containing Model in Psychotherapy, 3rd Asia Pacific Rim Counselling and Psychotherapy Conference, 2013年8月17日, Sarawak, Malaysia
⑤ Yasuhiro OYAMA, The development of Japanese psychotherapy: conflicts between knowing and not knowing the self, 3rd Asia Pacific Rim Counselling and Psychotherapy Conference, 2013年8月17日, Sarawak, Malaysia

⑥ Oyama, Y., Sakai, A. & Tomatsu, R., The implication of Noh play for Japanese psychotherapy, ジグムント＝フロイト研究所(招待講演), 2013 年 8 月 22 日, フランクフルト

⑦ 富松良介、坂井新、大山泰宏 、能と日本的心理療法：臨床実践としての Paradox Containing Model、日本心理臨床学会第 33 回秋季大会、2014 年 8 月 24 日、パシフィコ横浜

⑧ Yasuhiro OYAMA, Manazashi: looking at ‘the third’ in a Japanese psychotherapy setting, ジグムント＝フロイト研究所, フランクフルト精神分析研究所共同公開セミナー(招待講演), 2015 年 3 月 27 日, フランクフルト

⑨ Yasuhiro OYAMA, Nō und Psychotherapie: Vom Verhältnis zu Jungs Archetypentheorieher betrachtet, ボン大学アジア研究科日本･韓国文化研究所(招待講演) 2015 年 3 月 30 日, ボン大学

〔図書〕（計１件）

① 大山泰宏、心理学的観点からみたフィクション能力の獲得、大浦康介編著『フィクション論への誘い―文学・歴史・遊び・人間』所収、世界思想社、2012、299-301

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）
○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
大山　泰宏（OYAMA, Yasuhiro）
京都大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：００２９３９３６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし